

【虚実の考え方と薬方 1】

さて、漢方治療は、病態を陰陽と判断することに加え、「虚実」の区別によっても薬方を考えてゆきます。

陽証のなかの実証に対する処方がよく知られていますが、その他に陽証の中の虚証、陰証の中の実証、陰証の中の虚証の四型に分類します。そして、それぞれの病型に対応して薬方が考えられます。

「虚」とは空虚、なんにもない、からっぽという意味ですから、生き生きとした気持ち（これを精気といいます）の衰えた病態であり、病邪（病気を起こさせる原因）に対し、生体の防禦反応が衰えた病態といえます。

「実」は、充実の意味で、しっかりしているわけですから、病邪に抵抗する体力が十分に備わった状態です。

私が虚証の人にお出しするおくすりを考える時に、特に気をつけていることがあります。それは、麻黄（まおう）や桂枝（けいし）といった発汗作用のあるお薬を用いて汗を出させたり、瓜蒂（かてい、瓜のへた）を用いて吐かせたり、便秘があるからといって、いきなり十分量の大黄（だいおう）や芒硝（ぼうしょう）で下すことはしてはいけないことと教えられています。もっとも、瓜蒂は現在市場に流通していませんから、保険診療では用いることはまずありませんが……。こういった場合には、まず、体内の調整を図るという意味で和法（和解の意、消炎、強心、利水）を主とした薬方を与えます。

これに対し、実証の人には、病期に応じて葛根湯（かっこんとう）や麻黄湯（まおうとう）といった発汗作用の強い薬方や承気湯（じょうきとう）類、特に大承気湯といった瀉下（しゃげ）剤を十分に与えることが必要です。